

2017年8月27日(日)

説教:「バベルの塔」

聖書:創世記11:1~9、使徒言行録2:1~4

人間が《石の代わりにレンガを、しっくい代わりにアスファルトを》得て、高い塔を築いてくという古代の技術革命がそこにある。その目的は、《有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう》という事であった。人間が一つになろうとすることは、何か良いことのようにも思えるが、しかしそれは、神の御名が崇められる事よりも、自分たちの名が高められること、人間の技術、思想により、自分たちの思惑通りに事が進むこと、神の領域に達することを目指したということである。そして、神など必要としない、神無き人間社会・文化の築きであった。その事のゆえに、神は《彼らの言葉を混乱させ、…彼らを全地に散らされた》と聖書は記す。人間はより高く、上へと上ろうとするが、神はより低く、下へと降りてくださるお方である。神の思いとは逆方向に進んでいく人間の姿の象徴が“バベルの塔”である。

かつて日本は1872年(明治5年)に、琉球国であったこの沖縄を強制的に琉球藩とし、1879年には「琉球処分」という名目の下に武力による琉球併合を強行した。言語を奪い、名前さえも奪われ、より日本人らしくと皇民化教育が行われ、「一つの民」、「一つの言語」とされて行った。十五年戦争においても、中国や朝鮮、東南アジアを武力で侵略し、そこでも日本は「一つの民」、「一つの言語」を目指した。まさにこのことは、バベルの塔の建設であったと言えるだろう。もちろんそれは、日本だけではなく、列強国と呼ばれた欧米の多くがそうしてきた。バベルの塔の建設は、軍事力、経済力において、今なお続いていることとも言えるのだろう。

この物語の最後のところで、《主がそこから彼らを全地に散らされた》とあるが、それは、神の裁きによって終わっているということか？《散らされた》という時に、何か神の怒りがそこにあるように思いがちであるが、実はこの《散らされた》という語は、10章18節の終わりにある《カナン人の諸氏族が広がった》とあるところの《広がった》と同じ原語が使われている。ここは、ノアの箱舟の物語が記されているところで、その終わりの部分である。ノアの子孫が末広がっていくということが記されているがバベルの塔の物語が、《散らされた》で終わっているのは、人は、上を目指す者ではなく、横に広がっていくこと、横との繋がりをを目指す者であり、いくつもの民、いくつもの言語、「違う」ということを認め合うこと、理解していくことを、神は望んでおられる。このバベルの塔の物語から教えられることである。

もう一つ。使徒言行録2章を見たが、ここでは異なる言語で話し出しているにも関わらず、散らされることなく、それどころか一同が一つにされている。この出来事はバベルの塔

の出来事とは真逆にある。バベルの塔の人々には、お互い一人ひとりが、神に愛されている大切な存在であるということが抜け落ちている。「一つの民」、「一つの原語」に統一しようとする権力には、国の違い、地域の違い、皮膚の色、男女の違いに理解が乏しく、「命の尊厳」が欠如している。それに対し、使徒言行録での出来事には、一人ひとりの存在は、聖霊が降る存在であり、神に愛されている大切な存在であることが示されている。(神谷)